

町民文藝



只見短歌会

十一月詠草

大塚栄一

指導

亡き母の思ひ深しも雪の日にはや一周忌のはがきが届く
古川 英子
 十余年も障害の身を周りより勞られつつ米寿を迎ふ
吉津 政枝
 被災地に語りし人の思ひ深しあの日あの時映像に入る
関谷登美子
 温泉地より来し客か道聞きて頭下げつつ振り返りゆく
齊藤ちひろ
 足の爪切るに時かけれるわれを見かねて姪が代りてくれぬ
五十嵐英子
 夜すがらの風に庭木の葉は散りて遠くの山々くつきりと見ゆ
馬場 八智
 深雪の兆しと言はる亀虫は温き日和の窓に群がる
渡部ゆき子
 会ひたくて汝が名幾度も呼びしとふ姉の細りし手を握りしむ
五十嵐夏美
 初袋日向に広げ穴明きのあるかなきかを入念に見る
目黒 富子
 尾瀬の山の深さに一樹咲くと言ふやうらくの花焦れて久し
角田 一男
 収穫の豆打つわれを珍しと言ひつつ夫は側通り過ぐ
渡部ヨリ子
 わが家も災害大きに消防の孫は休まず集落廻る
新国 洋子

(出 詠 順)

只見俳句会

十二月例会

目黒十一

指導

指先の冷たきぬめりナメコ採る
一 穂
 冬囲う庭木の細木整然と
礼
 大型車の風圧を浴ぶ寒さかな
邦 男
 歳晩や大豆炒く香に包まれて
邦 男
 凧や登る階段十三十四
邦 男
 冬日和園児の慰問白虎隊
吉 児
 元朝や階前松の雪化粧
吉 児
 初明り中寿に生きる至福かな
隆 堂
 修羅の世や山茶花うすき紅ひそと
隆 堂
 峯高き立枯松や山眠る
邦 夫
 今朝の冬心は未だ追へつけず
邦 夫
 何時となく静かに眠る背戸の山
康 女
 真向いばふいに淋しき枯木山
康 女
 新雪の一夜に積る深さかな
笑 羊
 電飾のちよっぴり外の空き交番
笑 羊
 雪となる雲あげている噴火口
笑 羊
 数へ日や賀状書く手に木々の揺れ
リウコ
 賀状書き多災の年をふりかへる
都
 車椅子人の温情師走中
都
 山あれど谷あれど今冬茜
洋 子
 紅絹袴巫女手袋の白さかな
洋 子
 秘密なし両手ひろげて年迎う
洋 子
 父の倍も生きて晩学初旬会
恒 夫
 朗々と姿見せざる初鵜
恒 夫
 買物の上ののせある松飾
一 灯
 年越の蕎麦打つ音のかるやかに
一 灯
 水滴の気になる蛇口冬至かな
又巻歩
 南瓜切る厨に孫の声高し
又巻歩
 避難所の人影消えて冬来る
修 一
 いにしいの母の角巻き大なれや
修 一